



Ranald MacDonald

From an old daguerreotype taken about 1853, in the possession of Mr. A. T. MacDonald, of Great Falls, Montana.

ペリー来航の5年前にあたる1848【嘉永元】年、1人の24歳のアメリカ人青年が利尻島野塚に上陸します。その名はラナルド・マクドナルド、1824年アメリカ合衆国オレゴン州アストリア生まれです。

では、マクドナルドは、なぜ、どのようにして遠い鎖国下の日本を目指して利尻島の地を踏んだのでしょうか。

1845年頃から捕鯨船プリマス号に乗り込み、日本に上陸することを夢んでいたマクドナルドは、1846年に『フレンド』誌に掲載された記事「クーパー船長日本訪問談」を目にし、いっそう日本への思いを強くしたと考えられます。その内容は、アメリカの捕鯨船マンハッタン号が

小笠原諸島で救助した日本人漂流民22名を乗せて浦賀に行き帰還させたという記事です。ここから彼は、日本上陸へのヒントを得たのでしょう。

そしてついに、1848年6月、思い描いていた夢の瞬間が訪れます。3ヶ月間日本海で捕鯨をしていたプリマス号が、宗谷海峡を通り捕鯨基地のあるホノルルに戻るようになっていました。マクドナルドは、単身上陸することを船長に告げ、ボートに乗り込み陸地を目指します。最初の上陸地、焼尻島で数日を過ごした後、とうとう利尻島野塚で遭難を装いアイヌの人びとに救助されるかたちで上陸します。彼が、利尻という「島」を目指した理由としては、本土へ直接上陸することを避ける、あるいは利尻山を目印として海流にのり北上しやすかったことが考えられるでしょう。

では、彼の島での滞在はどのような状況だったのでしょうか。彼は、上陸して10日ほどは野塚で過ごし、島民タンガロ（多次郎？）と身ぶり手ぶりでやりとりしながら互いに心を通わせていました。しかし、当時運上屋のあった本泊に移送されてからは、不自由の身となり20日ほど拘束されます。その後、宗谷・松前に2ヵ月弱拘束され、長崎へ移送されてしまいます。

移送された長崎では、外国人という境遇でありながら、しだいに彼の人あたりのよい温厚な性格に周りの日本人も心を許していきます。座敷牢の中ではあったものの、オランダ語の通詞（通訳）であった森山栄之助（後にペリー来航の際、通詞を務める）ら14名に英語を教え、そして自らも積極的に日本語を学ぼうとしました。

1849年4月に日本を去るまでの約7ヵ月間を長崎で過ごした彼は、晩年も『日本回想記』を著すなど日本に対する熱い思いを持ち続けていたようです。

こうした日本での約150年前に行われた国の違う人同士のことばの壁を越えた交流は、勇気ある1人のアメリカ人青年と異国日本で彼を受け入れた人々もたらした歴史として再認識されるべき出来事といえるでしょう。

現在、野塚展望台には、彼の半生を描いた小説『海の祭礼』の著者吉村昭氏の文学碑とマクドナルドの功績を称えた顕章碑・英文銅板が建てられています。

